

連載

# 市長室から こんにちは

vol. 88



益田市長  
山本 浩章

5月に改元された令和元年が暮れ、新しい年が始まります。年初にあたり四季の花鳥風月が描かれた花札について述べます。

もともと西洋から伝わったトランプが江戸時代に賭博の弊害から禁止され、その抜け道として作られたのが花札だそうです。数字の代わりに12種類の花や動物が月ごとの風物詩として描かれ、日本文化を反映しています。

まず1月は松に鶴。年の初めらしい縁起の良い組み合わせです。

2月は梅に鶯（うぐいす）。いずれも春の訪れを告げてくれます。

3月は桜に暮。春爛漫、花見日和の雰囲気伝わってきます。

4月の藤に不如帰（ほととぎす）という取り合わせは、古今和歌集の歌から来ているそうです。

5月の花は、菖蒲（あやめ）か杜若（かきつばた）、いずれの説もあり、甲乙つけがたいところ。

6月は、百花の王とされる牡丹の周

りを蝶が優美に舞います。

7月は萩と猪。可憐な花と荒々しい猛獣の対比が絶妙です。

8月、芒（すすき）が生い茂り、満月がぼっかりと浮かぶのは旧暦の十五夜かもしれません。

9月の菊と盃は、長寿を願って飲む菊見酒の名残でしょうか。

10月の紅葉と並んで、つれなくそっぽを向く鹿の姿が「シカト（鹿十）」の語源とされます。

11月は雨の中、柳の枝めがけて何度も飛び跳ねる蛙の姿に小野道風が触発される場面が描かれています。

そして12月には、至高の霊鳥とされる鳳凰の止まり木である桐が来て、一年のキリとなります。

このように花札の一枚一枚には季節の物語が織り込まれています。賭博との親和性はさておき、全体として鑑賞に値する優雅で風流な芸術を構成しています。

ところで、48枚の札にはそれぞれ点数が付いています。20点札が5枚、10点札が9枚、5点札が10枚、そして半数を占めるカス札24枚を1点と数える

と、合計は264点。3人で取り合う場合、勝ち負けトントンの基準点は88点となります。花札のもつとも変化に富んだ遊び方とされる「八八」の名称の由来であるとともに、実は今月号の話題の決め手の一つでもありました。

の由来であるとともに、実は今月号の話題の決め手の一つでもありました。

## 益田市の文化財の紹介

### 第4回 僧形神坐像 (櫛代賀姫神社)

【問い合わせ先】 市文化財課 ☎ 31-0623

名称	僧形神坐像
読み	そうぎょうしんざぞう
指定	益田市指定文化財
種別	有形文化財（彫刻）
員数	1 軀
所在地	益田市久城町 963-1
所有者	宗教法人 櫛代賀姫神社
年代	平安時代（11～12世紀）
像高	63.5cm
指定年月日	平成 31 年 4 月 1 日

益田市指定文化財・有形文化財（彫刻）の僧形神坐像は、久城町の櫛代賀姫神社に伝わる神像で、現在は島根県立古代出雲歴史博物館に寄託されています。

一木造り※1で、ヒノキと見られる針葉樹の一枚から彫り出されています。内刳り※2はされています。着衣は襟だけが表現されている極めて簡略なもので、衣紋表現※3は全くありません。また、両足もはつきりとは表現されていません。これらは平安時代後期の神像に共通する特徴だといわれます。

このため、本像は純然たる僧侶の像というよりは、神仏習合※4の考え方により、僧侶の姿をした神像として作成されたと考えられます。

このような神像彫刻は、平安時代末期に下るにつれ造形が簡略になり、像高も小さくなりますが、本像は簡略ながらも大きい部類に入り、制作年代は11世紀に遡る可能性が



（島根県立古代出雲歴史博物館提供）

※1 頭部・胴部の主要部分が一本の木材から彫り出され、縦ぎ目のないもの。

※2 内部を刳り抜き、空洞にすること。木材が乾燥して割れるのを防ぐ。

※3 衣装類の皺やひだを表現すること。

※4 平安時代に日本古来の神への信仰と仏教信仰が融合した信仰形態。神は仏が権に現した姿（権現）と理解された。

あります。

櫛代賀姫神社は、延長5（927）年にまとめられた「延喜式神名帳」に見える、いわゆる「式内社」ですが、本像はその歴史を傍証するものです。

島根県内でも古い神像彫刻はあまりなく、本像はその代表的存在とされます。

【参考文献】『島根の神像彫刻』島根県立古代出雲歴史博物館、2018年。